

クワビーのレストラン

きゃく
クワガド-エのお客さん

ぶん え
文/絵・かめおかあきこ

はっこう
発行・えどがわく



ワラビのレストラン

クワガドきやく-Iのお客さん



ぶん え 文/絵・かめおかあきこ はっこう 発行・えどがわく



きょう あたら
今日は、新しくできた ワラビーの レストラン

「クワガドーエ」の 開店日。

あさ
朝から ドキドキ しっぱなしです。

さいしょ きやく
「最初の お客さんは だれだろう！」



やってきたのは アオサギです。

「こんなところに レストランが できたのね。

おすすめは ^{なに}何かしら」

「魚の ^{さかな}スープは いかがでしょう」

「いいわね、それにするわ」

「かしこまりました！」

ワラビーは ^{えがお}笑顔で スープを ^{はこ}運んできました。





ところが、

「ワラビーさん。長いクチバシの鳥が、
こんな浅いお皿やスプーンで、スープを飲めると思う？」
アオサギは、クチバシでスープをつついて見せました。

カツン！ カツン！

ワラビーは、お皿がわれなかとヒヤヒヤしながら言いました。
「でも、このスープ皿しかないんです」



アオサギは ^{さかな}魚だけ ^た食べると、
スープを ^の飲まずに
^{かえ}帰ってしまいました。



つぎ
次に ヘラジカが やってきました。

「お、すてきな レストランだな」
ヘラジカが 入ろうとすると……。

ガツン！ ガツン！

「わあ！ とびらが こわれちゃう」
「だって 君、こんな せまい 入り口じゃあ、
大きな 動物は 入れないじゃないか」

ヘラジカも 帰ってしまいました。



つぎ 次^{つぎ}に やってきたのは、最近^{さいきん} 森^{もり}のおくに 引っこしてきた、
とても 怖いと うわさの トラです。

ワラビーは おもわず、かんばんを かけかえて、
カーテンを しめてしまいました。

それからも トラは やってきました。
でも、そのたびに いないふりを しました。だって、
「お店に ^{みせ} 入^{はい}られたら ぼくが ^た 食べられてしまうよ！」

そんな ワラビーの レストランには、
ぽつりぽつりと お客^{きやく}さんが 来^くるだけでした。





ある日、ねこが やってきました。

「ねこ10ぴきで、ディナーの 予約は できますか？」

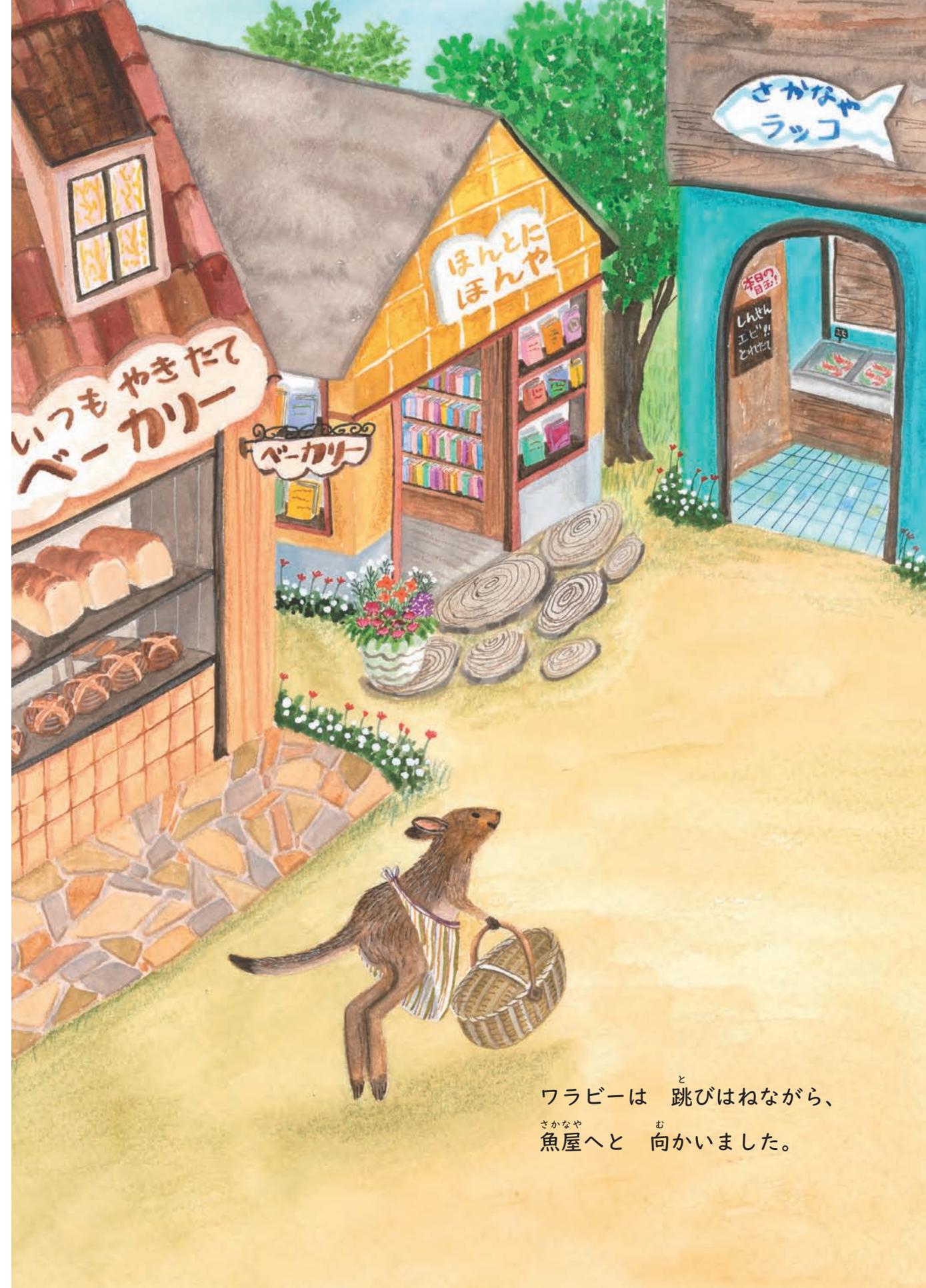
おじいちゃんのおたんじょう会 なんです」

「わあ、すてきですね！ もちろん できますとも。

お料理は 何を お出ししましょうか」

「魚の 料理を お願いします。おじいちゃんが 大好きなの」

「おまかせください！ お待ちしております」



ワラビーは と 跳びはねながら、
さかなや お 魚屋へと 向かいました。

「あれれ？ 魚が ない！」

「ごめんなさい、シェフ。

今日は もう 売り切れて しまったんですよ」

「え?! そんな! こまったなあ」

ワラビーは 頭を かくえこみました。

なんとかしなくては なりません。

「よし、自分で 魚をつろう！」

10ぴきくらい すぐに つれるさ」



A vibrant illustration of a pond scene. On the left, a brown rabbit wearing a striped apron stands on a rocky bank, holding a fishing rod with a blue line extending into the water. A blue and white cooler sits on the ground next to it. On the right, a large white crane with a blue crest and wing patch stands in the shallow water, holding a blue fish in its long, orange beak. The background features lush green trees and a clear blue sky.

「なんて ^{きよう}器用な クチバシなんだろう！
アオサギさん、^{ねが}お願いします。
^{さかな}魚を とるのを ^{てつだ}手伝ってもらえませんか？」

ところが、
^{さかな}魚は いっこうに つれません。

イライラしながら ^{あた}辺りを
^{みまわ}見回すと、アオサギが ^み見えました。

あの ^{なが}長い クチバシで、
^{じょうず}上手に ^{さかな}魚を つかまえています。

ワラビーは ^{かんしん}感心して、おもわず さげびました。

「おやすい ごようよ」

アオサギは じっと ^{みなも}水面を にらみつけると、サッと
クチバシを ^{みず}水に くぐらせました。と、次の ^{つぎ}しゅんかんには、
^{さかな}魚を くわえて います。アオサギの おかげで、
クーラーボックスは ^{さかな}魚で いっぱいになりました。

ワラビーが ^{れい い}お礼を言うと、アオサギは
にっこり ^{わら}笑って、^と飛んで いました。



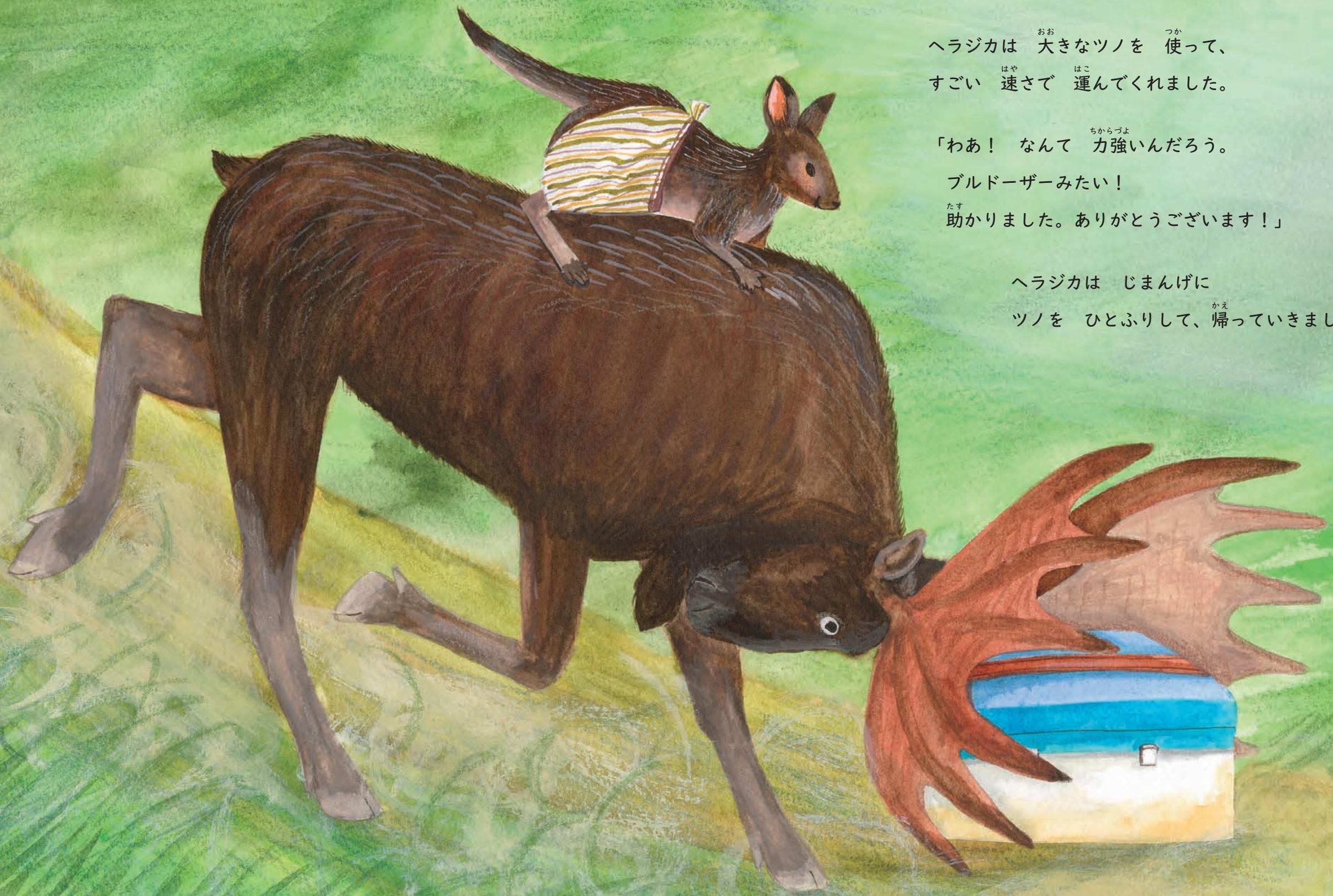


「いそいで ^{かえ} 帰って ^{じゆんび} 準備に ^と 取りかかるぞ。
ん、んん！ お、^{おも} 重い！」

^{たいりよう} 大量の魚で ^{さかな} クーラーボックスが ^{おも} 重くなってしまったのです。
ワラビーが ^ひ クーラーボックスを ^{すす} 引きずりながら ^{すす} 進んでいると、
^{よこ} 横を ^{とお} 通り過ぎようとしていた ^す へらジカが ^{はな} 話しかけてきました。

「^{おも} 重そうだな。 ^{はこ} 運んでやろうか？
そら、^{きみ} 君は ^の せなかに ^の 乗って」





ヘラジカは ^{おお}大きなツノを ^{つか}使って、
すごい ^{はや}速さで ^{はこ}運んでくれました。

「わあ！ なんて ^{ちからづよ}力強いんだろう。
ブルドーザーみたい！
^{たす}助かりました。ありがとうございます！」

ヘラジカは ^{じまんげに}じまんげに
ツノを ^{かえ}ひとふりして、帰っていきました。

「ああ……。ぼくには クチバシも ないし ツノも ない。
自分と ちがうから わかり合えないって 思っていたけれど、
そうじゃないんだ。ちがうからこそ 助け合えるんだ！
今度は ぼくも、アオサギさんと ヘラジカさんに、
レストランで おいしい料理を 食べてもらわなくちゃ」



さあ、^{いそ}急いで ディナーの ^{じゅんび}準備です。

ワラビーは ねこたちのために、

うでに よりをかけて ^{さかなりょうり}魚料理を つくりました。

ねこじたの ねこたちに ^あ合わせて、^{りょうり}料理は ぬるめに。

あとは ^く来るのを ^ま待つだけです。



ねこたちが やってきました。

「わあ、いいにおい」

「^{はや}早く ^た食べたいなあ」

「さあ、おじいちゃんを ^いむかえに 行こう」

と、そのときです。



なんと、こわいと うわさの トラと おじいちゃんねこが、
いっしょに やってくるではありませんか！

「おじいちゃんが ^た食べられてしまう！」



「道に迷ってウロウロしていたら、この方がやさしく
声をかけてくださってな。連れてきてもらったんじゃよ」

「ト、ト、トラですよ！」

「ほう、そうだったかい。よく目が見えないもんでな。

大きなねこさんかと思っただよ。でも……」

「トラでもねこでも構わんよ。
わしらは友だちになったんじゃ」

みんなはおどろいてトラを見ました。
トラははずかしそうにほほえんでいます。

「やさしそうだね」

「だれがこわいなんて言ったんだい？」

「こわい目にあったなんて話、聞いたことないよね」





「いつも そうなんです。みんな にげてしまうんです」

トラは さみしそうに ^{わら} 笑いました。

「それでも、仲良^{なかよ}くなってくれる だれかを さがして、

旅^{たび}を してきたんです。そしたら この町^{まち}に たどりついて、

レストランを ^み 見つけて……」

ワラビーと ねこたちは、^{もう} 申しわけない ^{きもち} 気持ちで
いっばいになりました。

「トラさんのこと、^み ^め 見た目だけで ^{こわ} 怖いって

^き 決めつけてしまっ^{ほんとう}て……。本当に ^{ごめん} ごめんなさい」



「心や 性格は 見えないからこそ、

おたがいを 知ることが 大切なんじゃないな。

料理だって、食べてみなければ 味が わからんからの。ワラビーさん」

「本当に そうですね！ さあ みなさん、お席へ どうぞ。

トラさんも どうぞ！」

トラは 目を うるませました。

「ぼくは ずっと この夜を わすれないでしょう」

ワラビーも ずっと ずっと、

わすれることは ありませんでした。



それから ^{つきひ}月日は ^{なが}流れ、
レストランは ^{まち}町の ^ばいこいの場に なりました。
さまざまな ^{どうぶつ}動物が やってきます。そう。だれでも。
もちろん あなたも、ね。



ともに生きるまちを目指す条例～前文～

ともに生きる。

私たちは、一人ひとりを尊重し、誰もが安心して暮らせるまちを目指します。

人とともに生きる。

このまちには、0歳から100歳以上の人まで
様々な年齢の人たちが暮らしています。

その中には、障害のある人や
外国籍の人などもいます。

一人ひとりの「ちがい」が尊重されることが、
まちづくりの源なのだと、
私たちは考えます。

社会とともに生きる。

このまちでは、一人ひとりの立場や
置かれている状況がちがう人々が集い、
学び、働き、遊び、活動しています。
ともに力を合わせる大切なのだと、
私たちは考えます。

環境とともに生きる。

海拔ゼロメートル地帯であるがゆえの
災害の危険性を受け入れ、
大規模な水害や巨大地震などが起きても
誰一人取り残さないことが大切なのだと、
私たちは考えます。

経済とともに生きる。

このまちで活動する事業者は、
大切な区民の一人です。
地域に力を与えてくれる存在なのだと、
私たちは考えます。

未来とともに生きる。

世界中の人々が、より良い未来を
創るために活動を始めています。
それらを学びながら
先頭に立って走り続けたいと、
私たちは考えます。

今日生まれた子どもたちが
2100年になって生活しているこのまちを、
夢と希望に満ちあふれたものにしたい。
私たちはその実現に向けて全力を尽くすことをここに誓い、
2021年、この条例を制定します。

あか
赤ちゃんからおとしりまでたくさんの方が暮らす江戸川区で、

みんなが幸せになるにはどうすればよいのでしょうか？

どのような未来になればいいと思いますか？

むずかしい問題もたくさんありますが、このえほんを読んだみなさんはきっと、

より良い未来へのヒントを見つけることができたのではないのでしょうか。

これからみなさんと一緒に、江戸川区が目指す「ともに生きるまち」を

つくっていければ、うれしく思います。

2022年8月

江戸川区長 齊藤 猛

かめおかあきこ

山形県米沢市生まれ。東北生活文化大学生活美術学科卒業。
作品に『ねんにいちどのおきやくさま』『はるをさがしに』『なつのやくそく』『あきにであったおともだち』（以上、文溪堂）『どんぐりのき』『ネルとマリのたからもの』（以上、PHP研究所）『わすれものをとどけに』（いのちのことば社）『木もれびより』（スマイルブックス）『とうみんホテルグッスリドーズ』（岩崎書店）など。童話の挿絵に『ホテルやまのなか小学校』『ホテルやまのなか小学校の時間割』（以上、PHP研究所）など。漫画本に『喫茶ホーリー』（いのちのことば社）がある。

ワラビーのレストラン

クワガドーエのお客さん

発行月……… 2022年8月

作 …………… かめおかあきこ

発行 …………… 江戸川区

〒132-8501 東京都江戸川区中央一丁目4番1号
電話番号 03-3652-1151（代表）

※本書の無断複製（コピー・スキャン・デジタル化等）は著作権法で認められた場合を除き、禁じられています。
また、代行業者等に依頼しデジタル化することは、いかなる場合でも認められていませんので、ご注意ください。
※本書の無断転載やオークション等への出品はご遠慮ください。

